

長野県松本市

IDEGAWA MINAMI

出川南遺跡

—第14次発掘調査報告書—



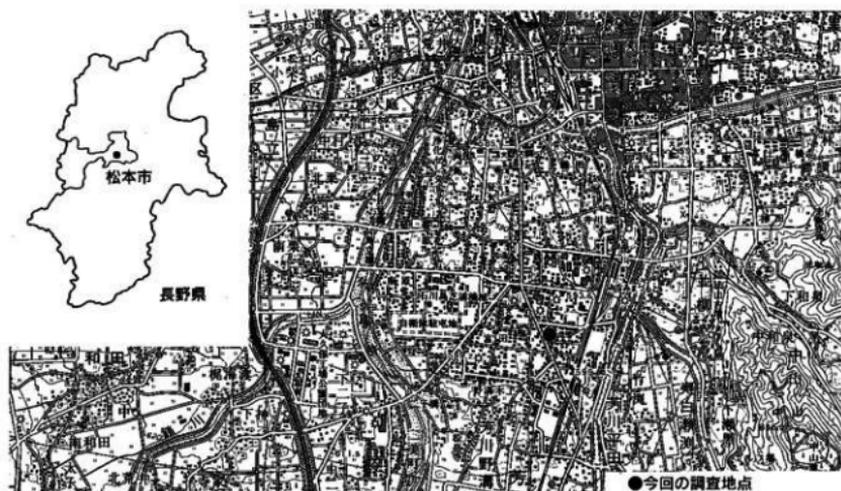
2009.3

松本市教育委員会

例言

- 1 本書は平成19年9月3日～10月31日に実施された、松本市芳野179番129、179番30に所在する出川南遺跡第14次調査の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は長野県による県営住宅南松本団地建て替え事業(11棟建設)に伴う緊急発掘調査であり、長野県より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査を実施、本書の作成を行ったものである。
- 3 本書の執筆は、Ⅰ：事務局、Ⅱ・Ⅲ：三村竜一、その他を宮島義和が行った。
- 4 本書作成にあたっての作業分担は、以下のとおりである。

遺物洗浄・注記：百瀬二三子	一覧表作成：荒井留美子
土器接合：白鳥文彦、中澤温子	遺構写真：宮嶋洋一、宮島義和、三村竜一
土器実測、トレース：竹平悦子	遺物写真：宮嶋洋一
遺構図調整、トレース：荒井留美子	総括・編集：三村竜一
- 5 本書で略称を用いる場合は以下のとおりに表記している。
 第○号住居址→○住、第○号掘立柱建物址→○建、第○号土坑→○土、第○号ピット→P○、第○号溝状遺構→○溝、サブトレンチ→ST
- 6 図中で用いた方位記号は全て真北を用いている。
- 7 本書では以下のものをスクリーントーンで表した。
 焼土集中範囲…  炭化物集中範囲…  柱痕範囲… 
- 8 遺構・遺物の記述で用いた時期区分や遺物の分類・用語等は、以下の文献に拠っている。
 文献1 松本市教育委員会 1994 『松本市出川南遺跡Ⅳ・平田里古墳群』
 文献2 (財)長野県埋蔵文化財センター 1990 「第5節 古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4-松本市内1-総論編』
- 9 本調査で得られた出土遺物及び調査の記録類は、松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館(〒390-0823 長野県松本市大字中山3738-1 TEL 0263-86-4710 Fax 0263-86-9189)に収蔵されている。



第1図 調査地点の位置 (1:50000)

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

出川南遺跡は、松本市街地の南部、芳野地区に位置する遺跡である。昭和61年に第1次発掘調査が行われて以来、これまで13次にわたる調査が実施されている。今回報告する第14次調査は、長野県住宅課による県営住宅松本団地建て替え事業(11棟建設)に伴って実施されたものである。今回の事業地は、周知の遺跡である出川南遺跡の範囲に該当しており、事業地の南に隣接する県営住宅建て替えの際にも緊急発掘調査を実施した(第8次調査)ことから、埋蔵文化財を包蔵していることが予想された。松本市教育委員会では建て替え前の県営住宅松本団地建設の際に遺跡が破壊された恐れもあるため、事前に試掘調査を実施したところ、埋蔵文化財の残存が確認された。このため事業者である長野県住宅課と埋蔵文化財の保護について協議を行い、発掘調査を実施して埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査及びこれに係る事務処理については松本市教育委員会が実施することとし、長野県と松本市の間に平成19年9月3日付で発掘調査業務の委託契約が締結された。

文化財保護法第94条に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書は、平成19年8月27日付長野県教育委員会宛てに提出された。

現地での発掘調査は平成19年9月3日～10月31日に実施した。調査終了後、平成19年10月31日付で長野県教育委員会に発掘調査終了報告書を提出した。また同日埋蔵物発見届を松本警察署に提出し、平成19年11月8日付で長野県教育委員会教育長から埋蔵物の文化財認定を受けた。

出土遺物及び現場測量図・写真等の整理作業と本報告書の作成作業は、現場作業に引き続き松本市立考古博物館において行った。

2 調査体制

調査団長：伊藤 光(松本市教育長)

調査担当者：三村竜一、宮島義和、内田陽一郎、小山貴広、吉井 理

調査員：宮嶋洋一、森 義直

協力者：荒井留美子、今井太成、小岩井洋、入山正男、河野清司、白鳥文彦、竹平悦子、福島 勝、藤田昌幸、布野和嘉夫、古屋美江、待井敏夫、道浦久美子、三代沢二惠、本木修次、百瀬二三子、八坂千佳

事務局：松本市教育委員会 教育部文化財課

宮島吉秀(課長、～平成20年3月)、小穴定利(同、平成20年4月～)、上嶋乙正(部課長)、塩崎 裕(課長補佐、平成20年10月～)、横山泰基(係長、～平成20年3月)、大竹永明(同、平成20年4月～)、直井雅尚(主査)、関沢 聡(同)、竹原 学(同)、小山高志(主任、平成20年4月～)、櫻井 了(主事)、柳澤希歩(嘱託)

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

今回の調査地点は松本市芳野179番129他にあり、県営住宅南松本団地の敷地内である。この周辺一帯は第2次世界大戦前後まで畑地として利用された。現在は商業地及び宅地として、市街化の著しい地区である。

調査地点の標高は597m前後である。東方約650mに田川、西方約1600mに奈良井川が北流している。調査地はほぼ平坦であるが、一帯は北西から南東方向に若干下がる地形といえる。地形的には奈良井川、田川によって形成された沖積地に位置している。基底礫層は奈良井川系統である。

基本的な土層堆積状況は第6図のとおりである。旧県営住宅建設などによる攪乱が激しく明確ではないが、暗灰黄色砂質土～オリーブ褐色土(4～8層)の地山に黒褐色砂質土～暗灰黄色土が堆積している。4層には鉄分の集積がみられ滲水性の痕跡を示している。調査区西端部は凹地状に落ち込み、土器・陶磁器や鏝などの遺物が人為的に遺棄された状況が観察された。調査区東側では、噴砂が数ヶ所で観察された。

2 歴史的環境

本遺跡周辺の遺跡分布は、田川右岸、田川と奈良井川に挟まれた地域、奈良井川左岸の3遺跡群に大きく分けられる。

田川右岸の遺跡群は、牛伏川氾濫の影響を近世以降に受けたものが多く、周知の遺跡はこの氾濫による破壊を逃れたものである。また、氾濫堆積物に覆われて未発見の遺跡がある可能性が高い。縄文時代は、住居址は確認されていないが、百瀬遺跡で土坑が確認されている。弥生時代には、標式遺跡として著名な百瀬遺跡や竹瀬遺跡・竹瀬南原遺跡で大規模集落が営まれ、以降は断続的ながら古墳時代から中世にかけて大集落が形成されている。

田川と奈良井川に挟まれた地域の遺跡群には本遺跡も含まれる。縄文時代の明確な遺構の確認はなく、弥生時代中期後半に出川西・平田北岡遺跡で該期の遺構が確認されている。この後一帯には古墳時代から平安時代にかけて平田北遺跡・平田本郷遺跡・吉田川西遺跡等比較的大規模な集落が確認されている。古墳は、本遺跡の範囲内に中期の平田里古墳群、東に前期の弘法山古墳があり、関わりが目される。

奈良井川左岸の遺跡群では、縄文～弥生時代の遺構は確認されていない。7世紀後半から本格的に大規模集落が急速に営まれ、下神・南栗・北栗遺跡等がある。一帯は河岸段丘上に位置する利水の悪い地域で、水路の整備が不可欠であることから、計画的な大規模開発により大きな集落が成立したと思われる。

3 過去の調査概要(第1表)

本遺跡のこれまでの調査地点を、東側・南側・北側の3群に大きく分けて概観したい。

東側は第1・6・11次調査(以下○次と略)があり、田川形成の基盤上に遺跡がのっている。遺構検出面は2枚あり、上面が古墳時代後期以降、下面が弥生時代後期～古墳時代前期である。

今回の14次を含む南側の地点は、2～5・7・8・12・13次がある。ジャスコ南松本店の建設に伴う4次では、古墳時代後期を中心とする比較的大規模な集落を確認し、古墳では中期の平田里1～3号古墳を新発見し調査した。奈良時代の集落は5・7・8・12次地点に広がっている。平安時代前期の集落は5・7・8・12次の東側にかけて分布し、小規模になるように見える。10世紀以降の集落は明確には認められていない。

北側の調査地点には9次があり、古墳時代前期および後期の集落を確認した。北側に近接する出川西遺跡では弥生時代中期後半から後期の集落が確認され、南松本駅周辺では古墳時代前期の遺物の出土が伝えられていることから、本遺跡の北側にかけて弥生時代後期から古墳時代前期の集落の展開が想像される。



● : 今回の調査地点 No. : 松本市遺跡台帳記載の遺跡番号 S=1/25,000

遺跡名	157 松本城下町跡	498 伊勢町	161 畷町	162 本町南	495 天神西	164 理橋	165 筑摩
	167 筑摩北川原	276 三の宮	172 井川城址	173 小島	166 三才	169 神田	480 神田西
	277 北栗	278 南栗	174 高宮	175 出川	170 平畑	176 出川西	177 出川南
	315 竹潤	304 大久保原	178 五輪	332 竹潤南原	291 平田北	298 下二子	290 野溝
	292 平田	171 山行法師	316 瀬黒	293 平田本郷	333 向原	299 中二子	295 高畑
	317 百瀬						
古蹟名	189 平畑1号	190 弘法山	191~193 平田里1~3号	433・434・438 中山北尾根1・2・3号			

第2図 周辺の遺跡

Ⅲ 調査の概要

今回の調査地点は松本市芳野179番地にあり、県営住宅南松本団地の敷地内である。事前の試掘調査によって、建て替え前の県営住宅南松本団地建物部分の遺構は既に消失していたが、建物外の一部で遺構・遺物の残存を確認したため、事業地内の既存建物部分を除く範囲を対象として本調査を実施した。表土除去は建設用機械を用いた。調査面積は383㎡である。

遺構検出面の設定

古代～中世以降の遺構は第6図の4層上面から掘り込まれている可能性が高いが、遺構と地山の色調・土質などが近似し検出が困難であったため、5層中(東端部では6層中)に1枚の遺構検出面を設定した。攪乱は建物部分外にも認められ、遺構検出面のおよそ半分を占めていた。攪乱部分にも消失した遺構が存在した可能性が高い。遺構検出は遺構の残存が想定される攪乱部分を除去して行うのが望ましいが、事故の防止や時間的制約などから攪乱部分に任意のサブトレンチを設定し、攪乱に覆い隠された遺構の検出を行った。

測量方法

平面測量は、簡易やり方測量で行った。国土地理院の旧平面直角座標第Ⅳ系X=23053.229、Y=48213.809に原点(EW0・NS0)を設定し、そこから3mのメッシュを組み、各交点に釘を打ち基準点とした。

検出遺構

古代を中心として遺構を検出・調査した。個々の遺構番号は住居址については13次までの続き(358・359住)を付け、その他は1号から付けた。遺構検出当初に土坑・ピットとした穴のうち、掘り下げの結果、掘立柱建物址の柱穴としたものは欠番扱いとした。土坑・ピットは便宜上検出時の長径が50cm以上の穴を土坑、50cm未満をピットとして扱った。この内調査地西端部で検出した13・14・16土は単独の土坑として扱ったが、直線上に並んでおり建物址に伴う柱穴の可能性もある。

溝状遺構として扱った1・2溝は凹地状地形で、人為的に廃棄されたと思われる土器が多数出土している。位置的に12次B区で検出した凹地状地形と一連の遺構である可能性が高い。12次ではこの凹地状地形の西側一帯では明確な遺構が分布していないことから、今回の調査地も遺跡の西端にあたと推定している。

検出遺構の概要は以下のとおりである。

- | | |
|-------------|-------------------------------------|
| ・住居址(竪穴住居址) | 2軒(358・359住 出川南第2～3段階2) |
| ・掘立柱建物址 | 2棟(1建・2建 古代1・時期不明1) |
| ・土坑 | 9基(1・3・6・7・12～16 古墳時代後期1・古代1・時期不明7) |
| ・ピット | 11基(1・2・4～11・13 時期不明11) |
| ・溝状遺構 | 5条(1・2・4～6 古墳時代後期～古代1・古代2・時期不明2) |

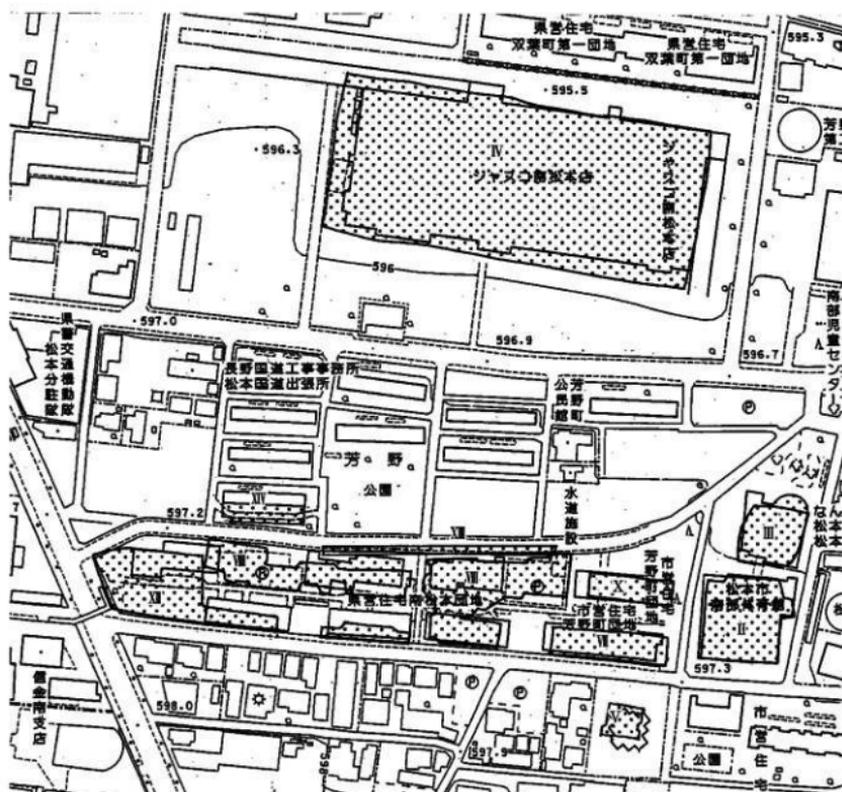
出土遺物

住居址・溝状遺構を中心として、土坑・ピット・掘立柱建物址などから以下の遺物が出土した。

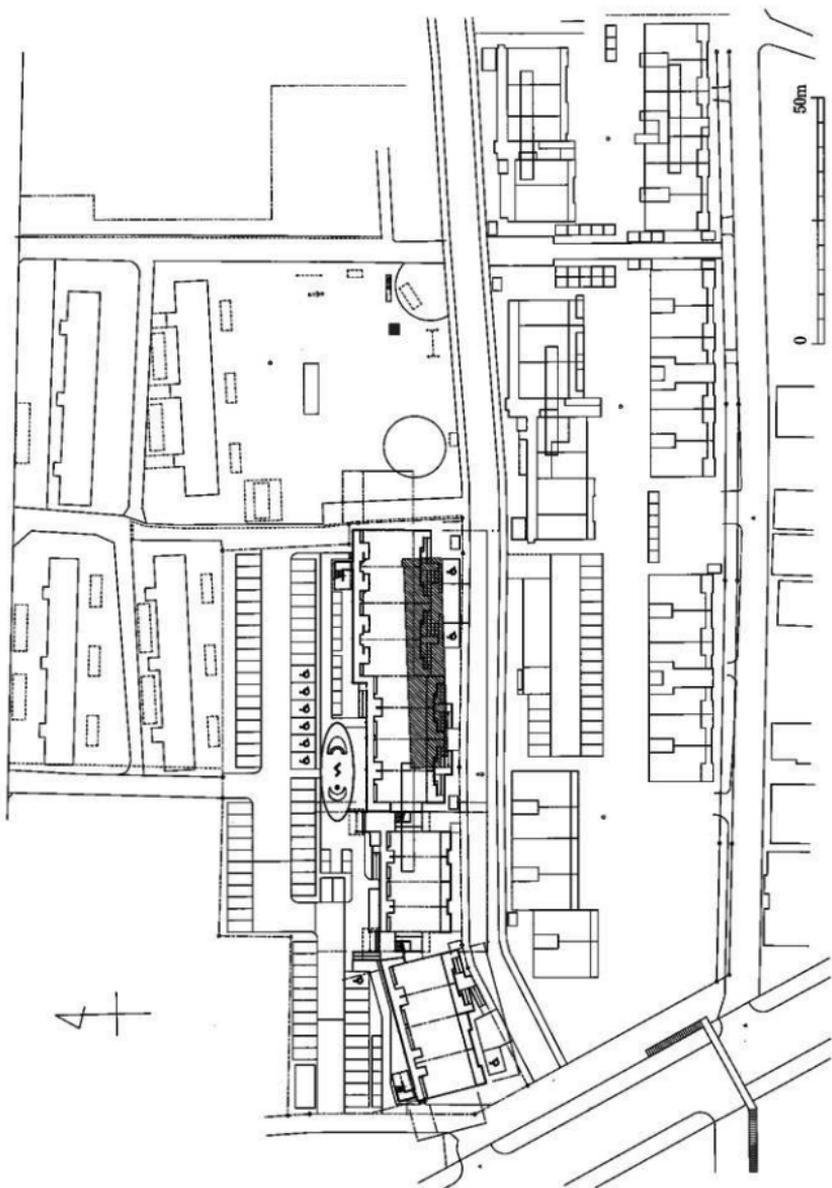
- ・土器・陶器(土師器・須恵器・灰釉陶器)



第3図 過去の調査地点 (1:10000)

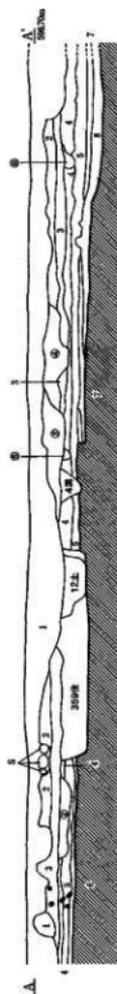


第4図 出川南道跡 西側の調査地点 (1:2500)

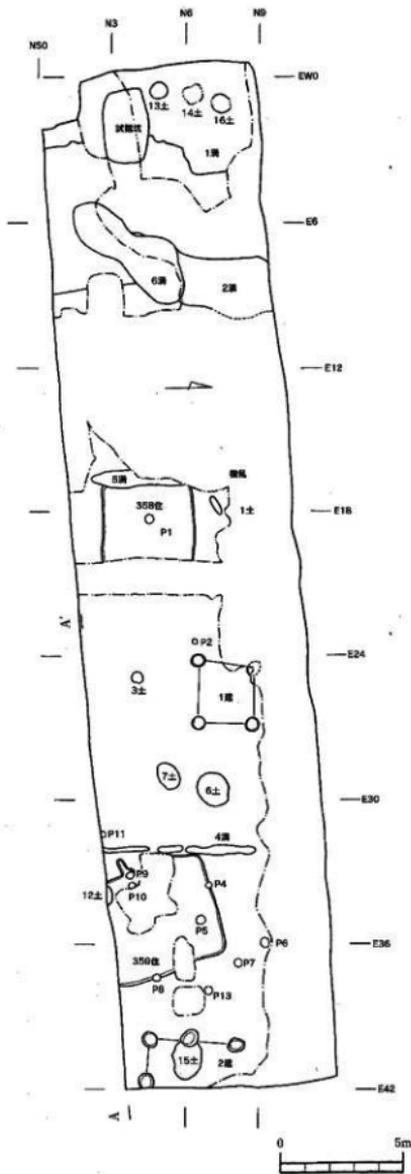


第5図 調査範囲図 (1:1000)

南陽西橋土層



- 1 砂質粘土 (砂質シルト)
 2 砂質粘土 (砂質シルト)
 3 砂質粘土 (砂質シルト)
 4 砂質粘土 (砂質シルト)
 5 砂質粘土 (砂質シルト)
 6 砂質粘土 (砂質シルト)
 7 砂質粘土 (砂質シルト)
 8 砂質粘土 (砂質シルト)
 9 砂質粘土 (砂質シルト)
 10 砂質粘土 (砂質シルト)
 11 砂質粘土 (砂質シルト)
 12 砂質粘土 (砂質シルト)
 13 砂質粘土 (砂質シルト)
 14 砂質粘土 (砂質シルト)
 15 砂質粘土 (砂質シルト)
 16 砂質粘土 (砂質シルト)
 17 砂質粘土 (砂質シルト)
 18 砂質粘土 (砂質シルト)
 19 砂質粘土 (砂質シルト)
 20 砂質粘土 (砂質シルト)
 21 砂質粘土 (砂質シルト)
 22 砂質粘土 (砂質シルト)
 23 砂質粘土 (砂質シルト)
 24 砂質粘土 (砂質シルト)
 25 砂質粘土 (砂質シルト)
 26 砂質粘土 (砂質シルト)
 27 砂質粘土 (砂質シルト)
 28 砂質粘土 (砂質シルト)
 29 砂質粘土 (砂質シルト)
 30 砂質粘土 (砂質シルト)
 31 砂質粘土 (砂質シルト)
 32 砂質粘土 (砂質シルト)
 33 砂質粘土 (砂質シルト)
 34 砂質粘土 (砂質シルト)
 35 砂質粘土 (砂質シルト)
 36 砂質粘土 (砂質シルト)
 37 砂質粘土 (砂質シルト)
 38 砂質粘土 (砂質シルト)
 39 砂質粘土 (砂質シルト)
 40 砂質粘土 (砂質シルト)
 41 砂質粘土 (砂質シルト)
 42 砂質粘土 (砂質シルト)
 43 砂質粘土 (砂質シルト)
 44 砂質粘土 (砂質シルト)
 45 砂質粘土 (砂質シルト)
 46 砂質粘土 (砂質シルト)
 47 砂質粘土 (砂質シルト)
 48 砂質粘土 (砂質シルト)
 49 砂質粘土 (砂質シルト)
 50 砂質粘土 (砂質シルト)



第6圖 遺構配置図

IV 遺構

1 竪穴住居址 (第7図・第2表)

第358号竪穴住居址

調査区は中央に位置する。規模は南北が381cmで東西は不明である。検出面からの壁高は17~19cmと浅い。北西部隅と東壁は攪乱に壊されている。5溝とP1に切られる。床は硬化面があり明確である。床上あるいは床付近に炭化物や炭化材が検出された。焼失家屋の場合と、出土遺物が比較的少なく、カマドも壊れていたことから、家屋廃絶時に焼いた場合のどちらも可能性がある。カマドは西壁のやや南寄りに位置する。南側の袖石が1つ残り、被熱により割れていた。北側には袖石の抜き取り痕が確認できた。支脚石は残っていないが抜き取り痕がある。カマド内からは土師器壺の破片が出土している。ピットは7基あり、この内P5~7は東の攪乱下で検出された。P2は断面で柱痕が確認でき柱穴の可能性があるが、他は位置関係と深さからみて柱穴と判断できるものはない。遺物は少量の土師器破片が散布した状況で、壺(1)以外に図化できるものはなかった。内外面のミガキ技法から本址の帰属時期は出川南第2~3段階に属すると推定される。

第359号竪穴住居址

調査区東に位置する。規模は東西が446cmを測り、南北は不明である。検出面からの壁高は10~22cmと浅いが、調査区南壁断面では約50cmを測る。2箇所を攪乱に切れ、南壁は調査区外である。隅丸方形を呈すると推定される。床は部分的に堅く、その広がりでも確認できた。カマドは西壁南側に位置し、煙道と火床面は確認できたが、袖石、支脚石は残っていない。ピットは11基あり、位置関係と深さからみてP10・11は柱穴の可能性がある。遺物は土師器の破片が主で、およそ床面全体から出土している。特に集中している様子は認められない。カマド範囲内では土師器の破片が多く出土し、小型甕(9)が認められた。本址の帰属時期は図示できた土器から出川南第3段階(7世紀後半)と推定される。

2 掘立柱建物址 (第8図・第3表)

1建は1間×1間で、246×221cmを計る。P4が攪乱で壊されているが、他の3基と同様に柱痕が確認できる。柱穴規模は径が52~58cm、深さは45~52cmを測る。2建は南北方向が2間で東西方向が調査区外になるため不明である。柱穴規模は径が62~72cm、深さは21~54cmを測る。P1より須恵器杯Aと推定される破片が出土した。底部がわずかに残り、回転糸切り痕が確認できる。帰属時期は古代3期以降である。

3 土坑・ピット (第9図・第4表)

土坑は調査区西に3基ある他は主に1建より東に集まる。6土は覆土が7層に分層できる。5層は焼土の堆積で直上に土師器壺(13)の破片がすべて内面を上にして並んだ状態で出土した。また壁に沿って炭化材が検出された。6層を除去すると壁や底部には東壁を除き、放射状に小穴が20ほど検出された。覆土に焼土が混入しており、棒状のものを斜めに差し込んで交差させ火を焚いた可能性がある。小穴は6層を貫通しておらず、6層堆積前後に火が焚かれた場合と火が焚かれた過程で6層と5層が形成された場合の2つが想定できる。帰属時期は古墳時代後期である。7土は覆土に焼土・炭化物が混入している。6土の南およそ80cmとかなり近接することから、6土と関わりのある土坑の可能性がある。13・14・16土は1溝(凹地状地形)内で検出された。土層から判断して、16土は柱穴であったと推定され、これらの土坑は建物址の可能性がある。14土からは須恵器杯蓋B(14)が出土しており、3期に帰属すると推定される。15土は東西を長軸とする隅丸長方形を呈し165×114 cm、深さ32cmを測る。須恵器の大型甕もしくは壺の破片が多量に出土したがほとんど接合ができなかった。帰属時期は2建のP2に切られることから古代3期以前である。

ピットは11基中8基が4溝より東側に集中する。その内P6・7・13の並びは建物址の可能性もある。

4 溝状遺構 (第10図)

1溝は攪乱に大きく切れ、全体の様子は不明であるが、位置的にみて12次で確認された凹地状地形と一連の遺構と推定される。調査区南西隅では火が焚かれた痕跡がある。調査区西壁付近には拳大の礫が投げ込まれた様子が認められ、土器片も混じっていた。須恵器杯Aの底部が1点出土しており、回転糸切りのの外周に回転ヘラケズリを施していることから、古代3～4期に該当すると推定される。2溝は最下層の粗砂の堆積にラミナが確認され、水流があったことがわかり、出土土器も磨耗しているものが多い。古墳時代後期の直口壺の可能性が高い須恵器破片があり、帰属時期は出川南第4段階と推定される。洪水などの影響でできた自然流路と推定され、位置関係から8次西区の溝1と12次B区の溝に対応する可能性がある。2溝は堆積を続け、検出段階では奈良時代(古代2～3期)の須恵器が出土している。1溝の須恵器甕の口縁が2溝のものに接合することから、2溝と1溝は1つの凹地状地形を形成していた可能性がある。6溝は2溝を切る凹地状地形である。出土した須恵器杯A・Bから判断して、帰属時期は古代2～4期と推定される。4溝は調査区外から北に延び、攪乱により切られている。遺構検出面ではかなり削平されているが、調査区南壁断面では幅約60cm、深さ約40cmを測る。覆土に鉄分の集積がみられ、滞水していた可能性がある。土器片が出土しているが帰属時期は不明である。5溝は攪乱に切られており一部分だけの検出となった。覆土は2層で上方細粒化がみられ、水流のあった可能性がある。帰属時期は出土した土器片からは推定できないが、358住を切ることから、古墳時代後期以降である。

第1表 過去の調査一覧

調査年度	実施年度	面積	調査成果	備考
I	昭和61年 (1986)	1325㎡	住居址5(弥生後期1、古墳前期1、平安前期1、平安後期1) 壁穴状遺構1、掘立柱建物址1、土坑1、溝4	遺構面2枚 上が平安、下が弥生後期～古墳前期
II	昭和63年 (1988)	1715㎡	住居址1(古墳後期) 土坑26、ビット61、溝1	
III	平成元年 (1989)	900㎡	住居址6(古墳後期～平安前期)	
IV	平成3年 (1991)	14688㎡	住居址116(古墳後期113、平安前期2、平安後期1) 掘立柱建物址21、柱列2、土坑7、ビット多数、溝11	平田里1～3号古墳(中期古墳)も調査
V	平成10年 (1998)	281㎡	住居址11(古墳後期1、奈良1、平安前期5) 土坑6、ビット11	
VI	平成10年 (1998)	1486㎡	住居址4(弥生後期前半3、古墳後期1) 壁穴状遺構2、掘立柱建物址3、土坑3、ビット55、溝6	遺構検出面2枚 上が古墳後期以降、下が弥生後期
VII	平成10年 (1998)	867㎡	住居址50(古墳後期～奈良11、平安前期39) 掘立柱建物址1、土坑175、ビット13、溝2、遺物集中2	
VIII	平成11年 (1999)	3293㎡	住居址48(古墳後期7、奈良～平安23)、掘立柱建物址1 土坑144、溝1、遺物集中2(古墳中期)、自然流路2	遺構検出面2枚 上が古墳後期以降、下が古墳時代中期
IX	平成11年 (1999)	240㎡	住居址2(古墳後期) 土坑4、ビット7、遺物集中2(古墳前期)	
X	平成11年 (1999)	560㎡	住居址4(平安前期) ビット5、溝1	
XI	平成13年 (2001)	188㎡	住居址3(平安後期2、弥生後期1) 土坑7、ビット234、溝1	
XII	平成13年 (2001)	2197㎡	住居址13(古墳後期1、奈良10、平安2)、土坑34、ビット70、溝1	
XIII	平成14年 (2002)	25㎡	住居址2(時期不明2)	トレンチ調査
XIV	平成19年 (2007)	383㎡	住居址2(古墳後期2)、掘立柱建物址2、土坑9 ビット11、溝状遺構5	

第2表 竪穴住居址一覧

住居 No.	平面形	規模 (cm)						床面積 (㎡)	長軸方位	カマド形態 種類・位置	時期	備考
		長軸	短軸	深さ								
				北	南	東	西					
358	方形?	(309)	381	19	17	-	-	(11.18)	N-107°-E	石組? 西壁中央南寄り	出川南第 2~3段 階	炭化物検出 焼失住居?
359	隅丸 方形?	(450)	446	10	-	22	12	(18.37)	N-85°-E	石組? 西壁南側	出川南第 3段階	区外につづく

* () は残存値

第3表 掘立柱建物址一覧

建物 No.	平面形 柱配り	主軸方位 面積(㎡)	規模 (cm)	柱間寸法 (cm)	柱 穴			時期	備考
					平面形	規模(cm)	柱径(cm)		
1	方形	N-81°-W 5.4	1間×1間 246×221	桁行 234~258 [246] 梁間 219~222 [221]	円形	径52~58 深45~52	4基 径18~26	不明	擾乱を受ける
2	不明	N-9°-E (6.2)	(2)間×(1)間 358×172	桁行 164~196 [179] 梁間 172	円形 楕円形	径62~72 深21~54	4基 径20~24	古代3 期以降	区外につづく

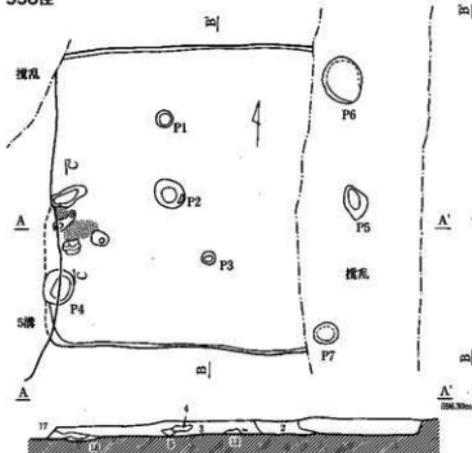
* () は残存値 [] は平均値

第4表 土坑一覧

土坑 No.	平面形	規模 (cm)			時期	備考
		長軸	短軸	深さ		
1	楕円形	82	28	11		
3	円形	47	42	43		
6	円形	136	130	(24)	古墳後期	小穴20・土器片・焼土・炭化物を検出
7	楕円形	118	88	16		
12	不明	(86)	(20)	(8)	出川南第3段階以前	359住より新 区外につづく
13	円形	73	68	64	古代3~4期以降	1溝より新
14	円形	83	82	62	古代3期	1溝より新
15	隅丸長方形	(165)	114	32	古代3~4期以前	2建P2より旧 須恵器片出土
16	円形	(82)	(65)	(47)	古代3期以降	1溝より新

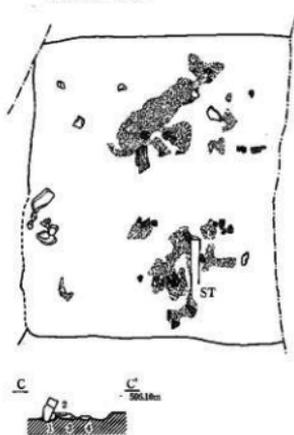
* () は推定値 () は残存値

358住



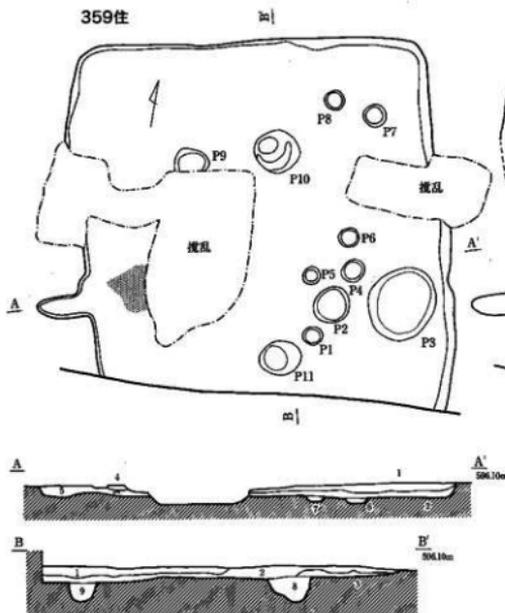
- | | |
|----------------------------|---------------------------|
| 1: オリーブ褐色土 (シルト、炭化物少量混入) | 10: オリーブ褐色土 (粘粒砂質シルト) |
| 2: オリーブ褐色土 (砂質シルト) | 11: オリーブ褐色土 (砂質土) |
| 3: オリーブ褐色土 (砂質シルト、炭混入) | 12: オリーブ褐色土 (炭化物多量混入ブロック) |
| 4: 暗褐色土 (粘土、炭混入、砂質) | 13: オリーブ褐色土 (炭多量混入砂質ブロック) |
| 5: オリーブ褐色土 (炭多量混入、シルトブロック) | 14: 暗褐色土 (炭多量混入砂質ブロック) |
| 6: 暗褐色土 (砂質シルト、炭・粘土多量混入) | 15: オリーブ褐色土 (炭多量混入砂質ブロック) |
| 7: 褐色土 (砂質土) 炭土層 | 16: オリーブ褐色土 (粘粒砂質ブロック) |
| 8: 暗褐色土 (砂質シルト) 粘土層 | 17: オリーブ褐色土 (砂質シルト) |
| 9: オリーブ褐色土 (砂質シルト、炭少量混入) | 18: 暗褐色土 (粘土粒シルト) |

遺物出土状況

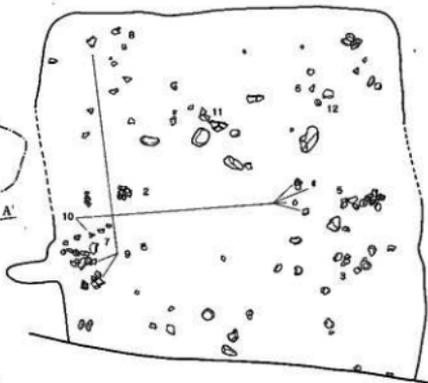


- | |
|----------------------|
| 1: 暗褐色土 (粘粒シルト) |
| 2: 暗褐色土 (粘土粒シルト) |
| 3: オリーブ褐色土 (砂質土) |
| 4: オリーブ褐色土 (粘粒砂質シルト) |

359住

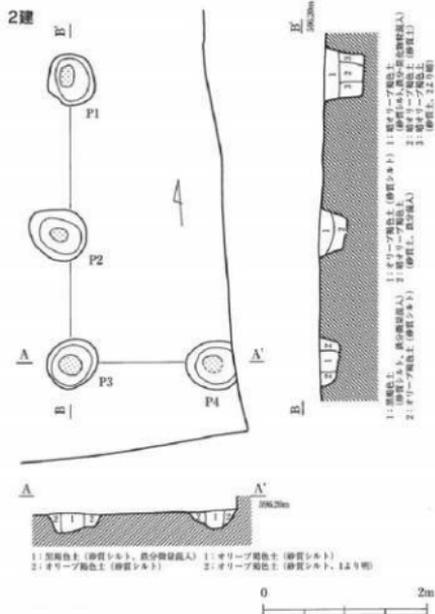
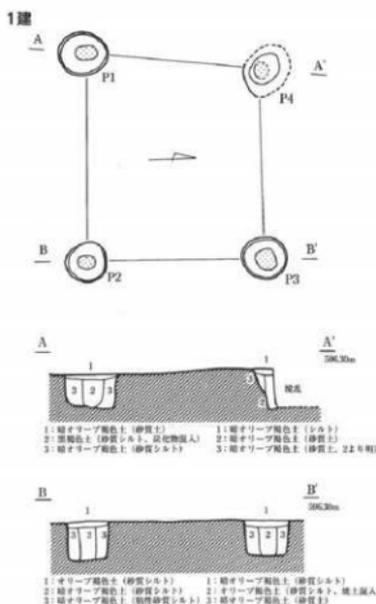


遺物出土状況



- | |
|---------------------------|
| 1: 暗オリーブ褐色土 (砂質土、炭少量混入) |
| 2: 暗褐色土 (砂質シルト) |
| 3: オリーブ褐色土 (砂質シルト、小炭多量混入) |
| 4: 暗褐色土 (砂質シルト、粘土少量混入) |
| 5: 暗褐色土 (粘土混入、粘粒砂質土) |
| 6: 暗オリーブ褐色土 (砂質土) |
| 7: オリーブ褐色土 (砂質シルト) |
| 8: 暗オリーブ褐色土 (砂質シルト、小炭混入) |
| 9: オリーブ褐色土 (砂質土、小炭混入) |

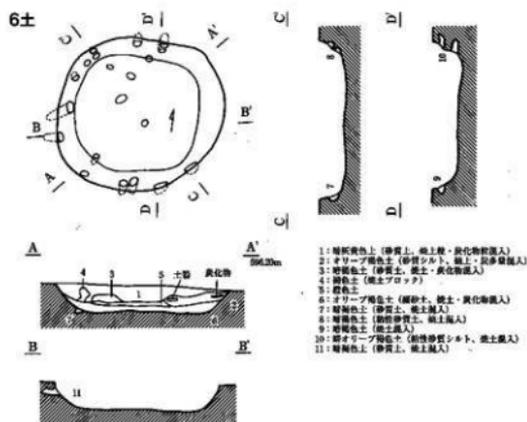
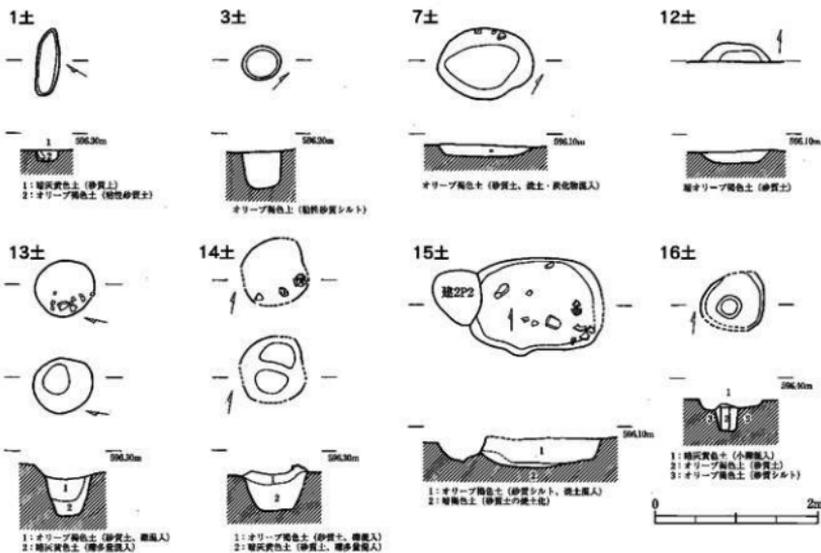
第7図 遺構(1)



第8図 遺構 (2)



調査区全景 (南東から)



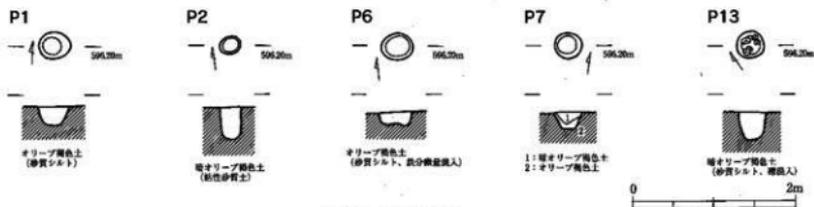
遺物出土状況



6層上面状況

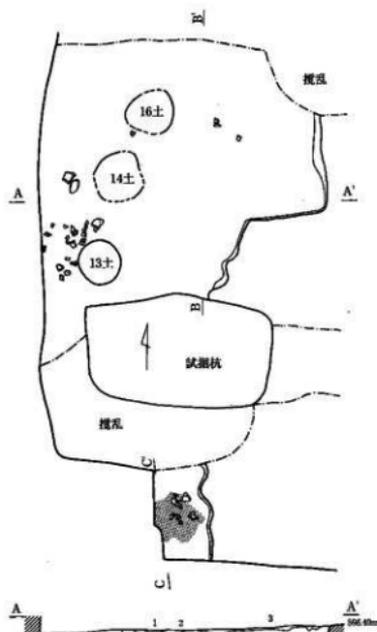


0 1m



第9図 遺構 (3)

1溝



A-A'・B-B'

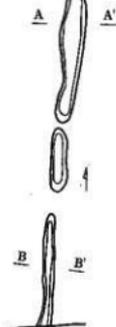
- 1: オリーブ褐色土 (砂質土)
- 2: 暗オリーブ褐色土 (砂質土)
- 3: オリーブ褐色土 (細砂、灰分混入)
- 4: 暗オリーブ褐色土 (1) (砂・灰分混入)
- 5: オリーブ褐色土 (砂質土)

6溝



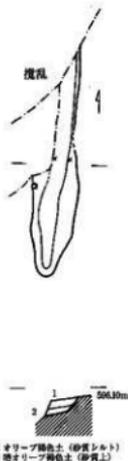
- 1: 暗オリーブ褐色土 (シルト)
- 2: オリーブ褐色土 (砂質土、灰分混入)
- 3: オリーブ褐色土 (砂質土)
- 4: 暗オリーブ褐色土 (灰分混入)
- 5: オリーブ褐色土 (砂質土、3.2%塩)

4溝



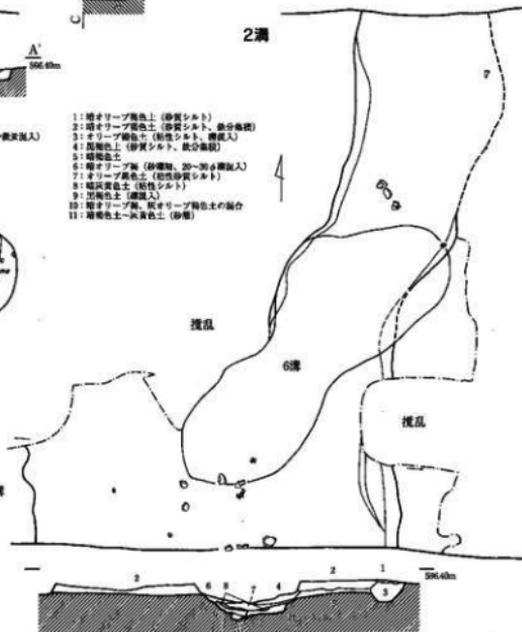
- A A' 596.10m
オリーブ褐色土 (砂質シルト)
- B B' 596.13m
オリーブ褐色土 (砂質シルト・灰分混入)

5溝



- 1: オリーブ褐色土 (砂質シルト)
- 2: 暗オリーブ褐色土 (砂質土)

2溝



- 1: 暗オリーブ褐色土 (砂質シルト)
- 2: 暗オリーブ褐色土 (砂質シルト、灰分混入)
- 3: オリーブ褐色土 (粘土シルト、微塵混入)
- 4: 灰褐色土 (砂質シルト、灰分混入)
- 5: 暗褐色土
- 6: 暗オリーブ褐色 (砂質物、20~30μ塵混入)
- 7: オリーブ褐色土 (粘土砂質シルト)
- 8: 暗褐色土 (粘土シルト)
- 9: 灰褐色土 (微塵混入)
- 10: 暗オリーブ褐色、暗オリーブ褐色土の割合
- 11: 暗褐色土-灰褐色土 (砂質)

第10図 遺構(4)

V 遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は土器・陶器のみで、土師器と須恵器・灰釉陶器に分類され、33点が図示できた。古墳時代後期、奈良時代、平安時代以降に分けられる。灰釉陶器は小片で検出面での出土である。

1 古墳時代後期の土器

(1)359住出土土器群(2~12)

土師器(杯・甕・甔)と須恵器(杯)がある。土師器杯は、底部の様子は不明だが体部中位~上位に稜があり、口縁部は内湾気味に立ち上がり端部でわずかに外反する杯N(5・6)と丸底で器体は半球状に外反し口縁部がやや内湾する杯A3(2・3・7)がある。甕は体部上位が張る小型甕A(9)がある。また、10・11は内外面ともに工具によるナデが行われ、8は内外面ともにミガキが施されている。12は残存度が悪いが甔で、外面に煤が付着している。須恵器杯(4)は口縁部が短く内湾気味でAc類に含まれる。帰属時期は土師器杯Nと須恵器杯Acの共存から出川南第3段階である。

(2)その他の遺構

358住の土師器壺(1)はやや口縁が短い、内外面にミガキがみられ、壺Baに分類できる。同様の技法による壺あるいは甕は4次において出川南第2~3段階の住居址から出土している。6土出土の甕(13)は体部中位が張るが、弱く張ることから甕Acに分類でき古墳後期に帰属する。外面にミガキが施されている。

2 奈良時代の土器

(1)2溝出土土器群(15~19)

須恵器のみ5点図示できた。杯・杯蓋・鉢がある。杯Aの15は形が歪んでいるが、体部がやや垂直気味に立ち上がる。底部は回転ヘラケズリである。杯Bの17は底部回転ヘラ切りののちヘラケズリが行われている。杯蓋Bの18の推定口径は15.8cmである。折り返し部分が外反する。19は鉢Aに分類できる。推定口径27cmを測る。帰属時期は、破片3点を含め須恵器杯Aの底部切り離しは全てヘラ切りであるが、15の口径が15cmを超える点、17の口径が11cmを切る点を考慮すると古代2~3期に含まれると推定される。

(2)6溝出土土器群(20~31)

土師器1点、須恵器11点が図示できた。土師器(20)は小型甕である。外面底部外周に手持ちヘラケズリが施されている。須恵器は杯・杯蓋・小型甕・鉢・短頸壺?がある。杯A(23~25)はいずれも底部回転ヘラ切りで、平底ではあるがやや張り出す。杯B(26・27)は、分量からみて26が杯BⅣ、27が杯BⅡに分類できる。杯蓋Bはつまみが小さく厚手のもの(28)と扁平なもの(29)がある。29は28と比べ天井が高い。鉢は3点(21・30・31)ある。21は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部は内湾する。底部は回転ヘラ切りののちヘラケズリが行われている。30は推定口径が31.2cmの大型品である。31は体部が内湾気味に立ち上がり屈曲して口縁部に至り、口縁部は外反する。短頸壺の可能性のある22の底部は回転ヘラ切りののちヘラケズリが行われている。須恵杯A(23~25)の帰属時期は古代2期の様相であるが回転ヘラ切りの底部が1点確認でき古代4期迄の幅があると推定される。その他の土器もこの範囲で捉えられる。

(3)その他の遺構

14土出土の杯蓋B(14)は推定口径が18.2cmあり、杯BⅡに対応する。古代3期に帰属する可能性が高い。

3 平安時代以降の土器

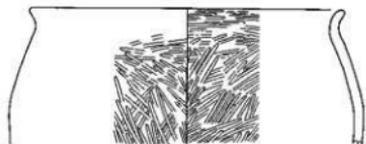
32は土師器の杯で、内面に煤が付着していることから灯明皿と推定される。ロクロによる成形であり、外面に回転ヘラケズリが施されている。底部はナデ調整され、切り離し技法は不明である。

33は須恵器杯Aである。体部はやや湾曲して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。底部は回転ヘラ切りで、底径は奈良時代のものと比較するとかなり小さい。9世紀代に属するものと推定される。

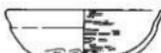
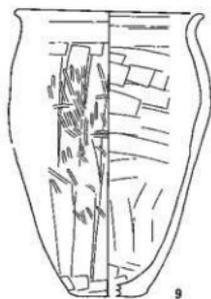
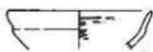
第5表 出土土器一覽

No.	出土地点	実測番号	種別	器種	法量 (cm)			残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
					口径	底径	器高	口縁	底部	外面	内面	
1	358住	358住-1	土師	壺 (26.1)			一部		褐~暗褐	褐~暗褐	口縁部ヨコナデ 外面ケズリのちミガキ 内面工具によるナデのちミガキ	
2	359住	359住-6	土師	杯A3 (14.8)		6.7	1/5		暗褐	暗褐	口縁部ヨコナデ 内外面ともナデのちヨコミガキ	
3	359住	359住-7	土師	杯A3 (13.4)			1/2		淡褐~暗褐	淡褐~黒	口縁部ヨコナデ 内外面ともナデのちヨコミガキ 底部手持ちヘラケズリ	
4	359住	359住-11	須恵	杯A身 9.4	11.4	3.3	3/4	完	暗灰	暗灰	口縁部ヨコナデ 外面ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ	
5	359住	359住-9	土師	杯N (12.0)			1/6		橙褐~淡褐	橙褐~淡褐	口縁部ヨコナデ 外面手持ちヘラケズリのちミガキ? 内面ナデのちヨコミガキ	
6	359住	359住-8	土師	杯N (13.0)			1/4		褐~黒変	褐~暗褐	口縁部ヨコナデ 外面手持ちヘラケズリのちミガキ? 底部ヘラケズリ 内面ナデのちヨコミガキ	
7	359住	359住-10	土師	杯A3 (13.4)			一部		暗褐	黒	口縁部ヨコナデ 外面ケズリのちミガキ 内面黒色処理 ナデのちミガキ	
8	359住	359住-2	土師	壺 (34.4)				1/10	褐	褐~暗褐	口縁部ヨコナデ 内面ミガキ 胴部内外面ともにナデのちミガキ	
9	359住	359住-1	土師	壺A 15.8	(6.6)	23.9	2/3	1/5	褐~暗褐	褐~暗褐	口縁部ヨコナデのち工具によるナデ 外面工具によるナデのちミガキ 内面工具によるナデ	
10	359住	359住-4	土師	壺 (6.9)			1/4		褐~暗褐	褐~暗褐	内外面、底部とも工具によるナデ	
11	359住	358住-3	土師	壺 (7.7)			9/16		褐~暗褐	褐~暗褐	内外面、底部とも工具によるナデ	
12	359住	359住-5	土師	壺 (8.8)			1/3		暗褐~黒	暗褐	外面工具によるナデ 内面工具ナデのちミガキ 外面スス付着	
13	6土	土6-1	土師	壺A c (21.4)			1/4		褐~黒変	褐~暗褐	口縁部ヨコナデのち工具ナデ 外面工具ナデのちミガキ 内面工具ナデ	
14	14土	土14-1	須恵	杯蓋B (18.2)		4.5	一部		暗灰	暗灰	つまみ部貼り付けのちナデ 外面ロクロナデ 回転ヘラケズリ 内面ロクロナデ	
15	2溝	溝2-1	須恵	杯A 15.2	6.5	3.55	2/3	完	灰	灰	口縁部ヨコナデ 内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラケズリ	
16	2溝	溝2-3	須恵	杯 (14.1)			1/6		暗褐灰~橙	暗褐灰~橙	口縁部ヨコナデ 内外面ともロクロナデ	
17	2溝	溝2-2	須恵	杯B 10.9	7.7	2.8	3/4	完	暗淡灰	暗淡灰	口縁部ヨコナデ 外面ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ 付け高台の外ナデ	
18	2溝	溝2-5	須恵	杯蓋B (15.8)			1/6		灰	灰	口縁部ヨコナデのち工具ナデ 外部ロクロナデ 自然輪	
19	2溝	溝2-4	須恵	鉢 (27.0)			1/14		暗褐灰	灰~暗褐灰	口縁部ヨコナデ 内外面とも工具によるナデ	
20	6溝	溝6-12	須恵	小型壺 (9.2)			1/2		褐~暗褐	褐	内外面ともロクロナデ 外面底部外周手持ちヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	
21	6溝	溝6-3	須恵	鉢 17.4	7.6	8.7	1/2	完	淡灰~暗灰	淡灰~暗灰	口縁部ヨコナデ 内外面ともロクロナデ 外面底部外周回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ 外面ロクロナデ 底部外周回転ヘラケズリ 内面ロクロナデ 自然輪 底部回転ヘラケズリ 外面ロクロナデ 底部外周回転ヘラケズリ 内面ロクロナデ 自然輪 底部回転ヘラケズリ 付け高台の外ナデ	
22	6溝	溝6-4	須恵	短頸壺?	4.2		完		淡灰~暗灰	淡灰	内外面ともロクロナデ 外面底部外周手持ちヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	
23	6溝	溝6-7	須恵	杯A 13.8	8.8	3.8	完	完	暗灰	暗灰	口縁部ヨコナデ 内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラケズリ 付け高台の外ナデ	
24	6溝	溝6-8	須恵	杯A (14.4)	6.6	(4.35)	1/12	2/3	暗灰~褐	暗灰~褐	口縁部ヨコナデ 内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラケズリ 付け高台の外ナデのち板押さえ	
25	6溝	溝6-9	須恵	杯A (10.0)			2/3		暗灰~暗褐灰	暗灰~暗褐灰	内外面ともロクロナデ 底部回転ヘラケズリ 付け高台の外ナデ	
26	6溝	溝6-10	須恵	杯B (13.8)	(9.0)	(3.6)	1/4		灰~暗灰	灰	口縁部ヨコナデ 内外面ともロクロナデ 付け高台の外ナデ 底部回転ヘラケズリ	
27	6溝	溝6-11	須恵	杯B (16.0)	(10.8)	(3.9)	一部	高台1/4	淡灰	淡灰	内面外周ともロクロナデ 付け高台の外ナデ	
28	6溝	溝6-5	須恵	杯蓋B 15.6		3.4	完		淡灰~暗灰	淡灰~暗灰	口縁部ヨコナデ 外面ロクロナデ・回転ヘラケズリ 内面ロクロナデ つまみ部貼り付けのちナデ	
29	6溝	溝6-6	須恵	杯蓋B (31.2)			1/8		暗灰	暗灰	外面つまみ部貼り付けのちナデ 周面回転ヘラケズリ 外周ロクロナデ 内面ロクロナデ	
30	6溝	溝6-1	須恵	鉢 (17.2)			1/7		暗灰~淡灰	暗灰~淡灰	口縁部ヨコナデ 外面ロクロナデのち工具ナデ 内面ロクロナデ	
31	6溝	溝6-2	須恵	鉢 (17.2)			1/7		灰~暗灰	灰	口縁部ヨコナデ 内外面ともロクロナデ	
32	検出面	検-1	土師	杯 9.0	6.8	2.5	7/8	完	褐~暗褐	褐~暗褐	口縁部ヨコナデ 外面回転ヘラケズリ 内面ロクロナデ 底部ナデ 内面スス付着	
33	検出面	検-2	須恵	杯A 13.1	6.0	3.6	2/3	完	淡灰	淡灰	口縁部ヨコナデ 内外面ともロクロナデ 底部回転糸取り	

358住 (1)



359住 (2~12)



10



11

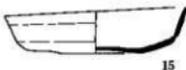
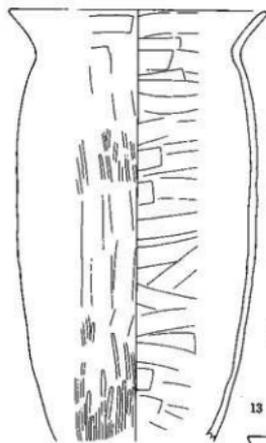


12

6± (13)

2溝 (15~19)

14± (14)



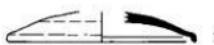
15



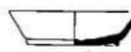
14



16



18



17

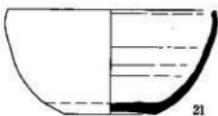


19

6溝 (20~31)



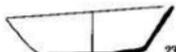
13



20



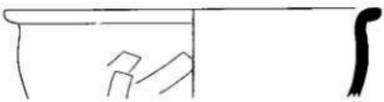
22



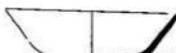
23



26



30

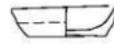


24

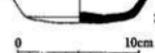


27

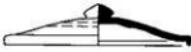
横出面 (32~33)



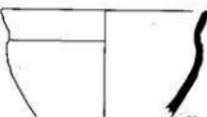
32



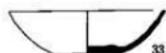
25



28



31



33



第11図 遺物

VI 総括

今回の発掘調査は出川南遺跡の南西部でほぼ遺跡の端にあたと推定され、調査区内の遺構もそのことを窺わせるような検出状況であった。この点を念頭に、過去の調査成果を踏まえながら出川南遺跡の集落変遷の状況を近接する遺跡の発掘成果を取り入れながらまとめてみたい。

出川南遺跡は古い段階では弥生時代後期の住居址が1次で確認されている。遺跡の東端に近く、現在の田川まで約130mの地点である。9次においては古墳時代前期の土器群が出土している。住居址は明確には捉えられていないが、遺跡の北端に位置し北には出川西遺跡が接しており、該期の遺構が検出されている。当時の集落は9次を南の境界とし北に展開していた可能性がある。東に位置する弘法山古墳築造時の集落の発見が期待されるが、9次の土器群は廻問Ⅲ式に対比できるものが含まれ(高杯・S字状口縁台付甕など)、弘法山古墳出土土器群よりやや新しい可能性がある。

4次では中期古墳である平田里第1～3号古墳が調査された。第1号古墳出土の須恵器はTK23～47に対応すると推定される。5世紀後半の土器様相である。しかし本遺跡内ではこの時期の住居址が発見されていない。周辺遺跡でも該期の住居は検出されておらず、これらの古墳を営んだ集団の集落は現段階では不明である。

住居址が集中し、集落としての様相をとらえることができるのは古墳後期(6世紀後半以降)である。4次で多数の住居址が検出され出川南第1～4段階(6世紀後半～7世紀後半)が設定された。該期の住居址は遺跡北端の9次、南西端の12次でも確認でき、集落の広がりが認められる。

今次調査区で検出された竪穴住居址は2軒である。帰属時期は古墳後期であり、359住は出川南第3段階である。358住は出川南第2～3段階に含まれると推定される。4次では古墳後期の住居址が密集しているが、約140m南に当たる8次・12次・今次の範囲内では出川南第1～2段階の住居址が1軒、2段階の住居址が2軒、3段階が3軒に留まり、古墳後期においては集落の南縁辺部であったこと推定される。しかし次の第4段階以降では状況が異なってくる。4次では該期の住居址が20軒ある。出川南第4段階を古代1期と捉えると、5次に確認できるとともに南に隣接する平田北遺跡への集落の広がりが見える。さらに古代2期～3期の住居址が存在し奈良時代への集落の継続が確認できる。これに対し4次では第4段階(=古代1期)の後集落は断絶し、平安前期まで住居址はみられない。奈良時代に入って集落の中心が南に移動したものと推定される。今次は住居址がないものの、土坑・溝から奈良時代の遺物が出土していることから該期の集落の北辺部であったと推定される。

以後平安時代前期(古代5期～8期)の住居址は8次に集中し、南東の5次に広がっている。このように出川南遺跡中央部から南部にかけては平田北遺跡も含めて古墳後期(6世紀後半)から9世紀後半までその中心が移動しながらも連続と続く集落域であると捉えることができる。しかし、それ以後集落が断絶した可能性があり、調査範囲内では10世紀の住居址が検出されていない。11世紀の住居址は1次で2軒検出されており、古代13期・14期の集落が遺跡の東側に成立したことが推定される。

以上のように古墳後期の集落から奈良時代の集落へとその中心が移動していること、またそれぞれ集落の縁辺部の状況を知ることができた。特に南西部の境界はそのまま遺跡の境界となることが凹地状地形の存在から分かってきた。さらに6土のように特殊な遺構が集落の南西端部近くで発見されたことは、当時の集落の境界と儀礼的な行為の関連について何らかの示唆を与えてくれる可能性がある。今後の研究成果に期待したい。

最後に今回の調査の実施に際して多大な御協力をいただいた長野県住宅課、ならびに県営住宅南松本団地をはじめ地元関係者の方々に感謝の意を表して総括としたい。

358住 完掘状況 (東から)



359住 カマド遺物出土状況
(東から)



359住 完掘状況 (東から)

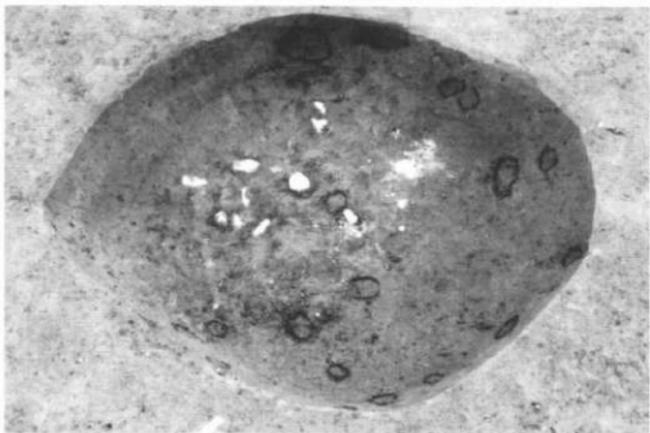




2建 完掘状況 (西から)



6土 遺物出土状況 (西から)



6土 小穴検出状況 (西から)



1



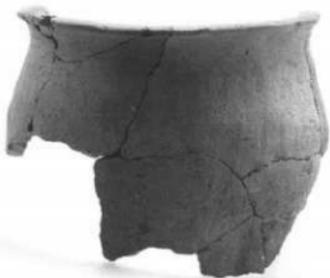
6



2



4



9



15



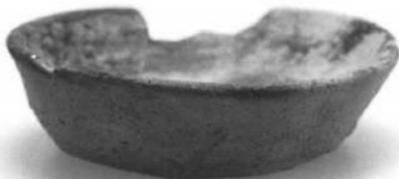
17



21



23



32

長野県松本市 出川南遺跡14 緊急発掘調査報告書抄録

調査の目的	ながのけんまつもとし いでがわみなみいせき だい14じはくつちょうさほうこくしょ
調査機関	長野県松本市 出川南遺跡 第14次発掘調査報告書
調査報告書	
調査報告書	
調査報告書	松本市文化財調査報告
調査報告書	No.198
調査報告書	宮島義和、三村竜一
調査報告書	松本市教育委員会
調査報告書	〒390-0874 長野県松本市大手3丁目8番13号 TEL 0263-34-3000℡
調査報告書	(記録・資料保管：松本市立考古博物館 〒390-0823 松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710)
調査報告書	2009(平成21)年3月31日(平成20年度)

調査報告書	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査施設
出川南	長野県松本市秀野 179番129 179番30	20202	177	36度 12分 24秒	137度 57分 51秒	20070903～ 20071031	383m ²	県営住宅建設

調査報告書	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
出川南	集落址	古墳 奈良 平安	竪穴住居址 2軒 掘立柱建物址 2棟 土坑 9基 ピット 11基 溝状遺構 5条	土師器 須恵器 灰胎陶器	古墳時代後期～平安時代の集落址の一部を確認した。

出川南遺跡は、奈良井川、田川によって形成された沖積地に立地する遺跡である。今回の調査地は、遺跡全体の南西縁辺部にあたる。建て替え前の県営住宅建設等により、遺構の大半は破壊され、残存状況は良くなかったが、一部で古墳時代後期から平安時代の遺構・遺物を確認することができた。主な遺構の内、竪穴住居址2軒は古墳時代後期と推定される。同時期の特徴的な土坑には、焼土の堆積と隣・底に多数の小穴を伴うものがある。遺物は竪穴住居址、溝状遺構を中心として出土したが、量的には比較的少ない。

松本市文化財調査報告No.198

長野県松本市

出川南遺跡

—第14次発掘調査報告書—

発行日 平成21年3月31日

発行 松本市教育委員会

〒390-0874 長野県松本市大手3丁目8番13号

印刷 株式会社総合印刷